



「なぜ高い所で体がムズムズするの」「カラオケでマイクを持つと小指がピンンとなるのはなぜ」「なぜダメな医者をやブ医者というの」「どうして女性は男性よりも長生きなの」「人と別れる時に手を振るのはなぜ」「なぜサツカーは手を使つてはダメなの」
好奇心旺盛な5歳で2頭身の少女チコちゃん、当たり前過ぎて考えてもみなかったことを、解答者の芸能人に「なぜ、どうして」と問いかけるクイズバラエティ番組「チコちゃんに叱られる！」が人気である。チコちゃんにタジタジになると、待ってましたとばかりにチコちゃんの顔は真っ赤に巨大化し、顔

ポーッと生きてんじゃねえよ

— 好奇心を持ち考えること —

情報広報部長

山科 賢児

から黄色い炎と白煙が出てくる。そして番組の見せ場の決め台詞「ポーッと生きてんじゃねえよ！」と、チコちゃんは解答者を叱って錆びついた感性を刺激する。
叱られるのは解答者なのだが、視聴者自身が叱られているような感覚にも陥る。番組のテンポが小気味よく、チコちゃんと解答者との間で交わされる会話がなぜか「ニヤツ」と抑えた笑いを誘い、思考回路を活性化する。大人から「ポーッとしてるんじゃない」と言われると反発したくなるようなことでも、5歳の女の子に言われるとすんなり受け入れてしまう。叱られても却って納得さえ覚えるのが番組の妙味である。

情報の制御が難しい現代では、発信される情報を追いかけるのに精一杯となり、その情報が真なのか偽なのか、疑問を持ち判断する時間や、気持ちに考える余裕がなくなっている。そのため常識とされていること、昔から行われていること、大勢の人が信じていることは、疑う余地がなく正しいと信じて暮らしてきている。今まであったことがこれからも当然変わらず続くはず、続いてほしいという感覚に陥っているのが現代人の心の傾向である。
頭に入力される情報を鵜呑みにして発言したり行動したりするのが多くなった結果、好きか嫌いか、良いか悪いかの二分法の思考に陥りがちとなる。そんな世相に対してチコちゃん、疑問を持ち自分の頭で考えたいよと気づかせてくれる。

2018年のノーベル医学・生理学賞の受賞者が京都大学の本庶佑氏に決まった。本庶氏は免疫の働きにブレーキをかける蛋白質「D-1キ」を発見し、このブレーキを取り除き、がん細胞を攻撃するがん免疫治療薬「オプジーボ」の開発に結びつけた功績が評価された。がん細胞が生体の免疫監視機構から逃れる戦略の一つを攻略したこと、癌学会でも長年傍流であったがん免疫の研究に俄かに注目が集まっている。なぜ宿主である生体の制御を離れてがんが発生するのか、なぜがんが転移して生体を死に導くのかなど、がん免疫の研究は生物としてのがんの適応戦略の解明に今後寄与するはずである。
受賞の際、本庶氏の記者会見の言葉も注目を集めた。「研究のモットーは、何かを知りたい好奇心がある。教科書に書いてあること

を信じない。本当はどうなっているのかという心を大切に。自分の目でものを見る。そして納得する。そこまで諦めないこと」また「僕はいつもネイチャーやサイエンスに出ているものの9割は嘘で、10年経ったら残って1割だと言っていますし、大体そうだと思います」と過激で刺激的である。
世の中は強い経済・子育て支援・社会保障の実現のため、「一億総活躍時代だ、働き方改革だ、人生100年時代構想だ」とキヤッチフレーズの洪水である。だからと言って「チコちゃんに叱られる」の森田アナのナレーション「今こそ全ての日本国民に問います」に做って人々に意見を求めることもせず、一方的に施策が押し進められている。実行すること自体に意義ありきで、何の目的で誰のための改革なのかの議論は置き去りにされたまま、物事は性急に進行している。
それに対して、「そんなことも知らずに、やれ〇〇だとか、〇〇などと言っている日本人のなんと多いことか」の容赦ないナレーションの指摘どおり、「世の中はそうなっている、そういうものだ」といった厭世的気分が人々の心を覆っている。疑問を呈し自己主張しようものなら、あらゆることからバツシングの嵐である。窮屈な規制ばかりが多くなり、人間関係にも気を遣い疲れ、生活に高揚感もなくなり、「ポーッと生きてんじゃねえよ」と叱られるのは仕方ないかもしれない。医療の世界でも、他者から見れば奇妙なのに、何も不思議がらず当然とされていることが少なからずある。「なぜ医師はお互いの名前を呼び合うときに「先生」と言うの」「診察の時医師が座る椅子は立派で、患者が座る椅子は硬い丸椅子なのなぜ」などは一例だろう。チコちゃんに「ポーッと生きてんじゃねえよ！」と叱られてもいいから、常識や情報に疑問を持ち、自分の頭で考える習慣が要求される今日此の頃である。